

令和7年度 江戸川区熟年しあわせ計画及び介護保険事業計画検討委員会

議事要旨

開催日時：令和8年1月30日（金） 午後7時00分～午後8時50分

開催場所：グリーンパレス 千歳・芙蓉

所属等	氏名	出欠
神奈川県立保健福祉大学	○太田 貞司	欠席
聖学院大学	古谷野 亘	出席
江戸川区医師会	◎小川 勝	出席
江戸川区医師会	○浅岡 善雄	出席
江戸川区歯科医師会	小宮 徳春	出席
江戸川区薬剤師会	佐々木 章吾	出席
東京都医療ソーシャルワーカー協会	藤井かおる	出席
江戸川区訪問看護ステーション連絡会	鈴木 佳織	出席
江戸川区熟年者福祉施設連絡会	林 義人	出席
NPO法人江戸川区ケアマネジャー協会	山本 裕	出席
江戸川区訪問介護事業者連絡会	江澤 岳広	出席
江戸川区地域密着型サービス事業者連絡会	梅澤宗一郎	出席
熟年相談室（地域包括支援センター）	佐藤 豊朗	出席

所属等	氏名	出欠
江戸川区民生・児童委員協議会	加納 幸子	出席
江戸川区社会福祉協議会	岡村 郁子	出席
なごみの家（江戸川区社会福祉協議会）	小嶋 亮平	出席
公募区民	行田 元	出席
公募区民	田部井 清	出席
公募区民	阿部 仁	出席
公募区民	小森三知代	出席
江戸川区連合町会連絡協議会	中川 泰一	出席
江戸川区くすのきクラブ連合会（代理）	大山 芳男	出席
江戸川区ファミリーヘルス推進員会協議会	石井 恵子	出席
江戸川区議会議員	小林 智夫	欠席
江戸川区議会議員	佐野 朋子	出席
江戸川区副区長	船崎 まみ	欠席

◎委員長 ○副委員長

- 1 開会
- 2 委員長あいさつ
- 3 交代委員の紹介

NPO法人江戸川区ケアマネジャー協会 山本裕

江戸川区社会福祉協議会 岡村郁子

江戸川区議会議員 佐藤朋子

4 議事

委員長の許可により傍聴人 1 人が入室

委員長

議事の（２）から（４）番について、事務局の説明をお願いします。

事務局

資料 3～9 について説明

委員長

資料 10 の論点をもとに、事務局からの説明に対する意見や近況など、一人ずつご発言をお願いしたい。

委員

少子高齢化が加速して介護を必要とする人口が増える一方で、介護する側の人口が先細る状況は今後も続いていくと考えられる。そうすると、一人ひとりの健康寿命をいかに伸ばしていくのかが鍵になるのだろう。

くすのきクラブやシルバー人材センターなどの社会参加が活発という区の現状は、非常に素晴らしいことだと思う。社会との繋がりが豊かな方は、将来も健康で暮らせて認知症にもかかりにくいというエビデンスもある。今後も行政では力を入れていただきたい。

私の医院でも、シルバー人材センターから 70 代の方を朝の掃除で 3 時間ほど派遣していただき、3 年ぐらいになる。とても熱心に仕事をしていただいております、おかげさまで患者さんの治療後のアンケートでも院内が綺麗で気持ちいいという意見をいただいている。それをお掃除に来ていただいている方にお伝えすると大変に嬉しそうにされていて、このように日々の刺激で気持ちの張りを保つ仕組みが充実しているということは、まさに江戸川区の強みではないかと思っている。

歯科医師会としても、区の委託事業として、舌や喉など食べる・飲み込むなどの機能チェックをする口腔ケア検診「江戸川歯つらつチェック」（65 歳の区民は年 1 回無料で受診可能）を行っている。区のバックアップもあり検診者は徐々に増えてきており、引き続きこういった事業で、介護保険事業や介護予防に貢献していければと思っている。

委員

私自身もこのような会議や多職種研修などに参加し、さまざまな職種の方との顔の見える連携が深められる機会はよい取り組みと感じている。やはり、実際に相手と顔を合わせた状態の方が相談事などしやすい。私も実際に介護現場の方と居宅に入るときも、担当者会議等に参加すると、その場でいかなる問題があるのか共有でき、何かあったときでもすぐ対応できる連携ができるので、多職種に係る研修等は引き続き行っていただきたい。

私もその都度会議や研修に参加して、顔の見える関係性の強化を続けていきたいと思う。そうした中においても、顔の見える関係になった際、職種ごとにそれぞれどのような仕事をしているのかまで見えていない部分もある。今後多職種の意見交換会などで、それぞれの仕事の強みを交換し合えればと思う。

薬剤師会としても、引き続き他の職種の方々と連携して講演会を行い、地域の介護者に向けた薬の相談会を実施している。そのような活動を行う中で、薬剤師としてどのようなことができるのか、引き続き広めていければと思っている。

委員

ソーシャルワーカーの団体から見ても、日頃からの介護の研修などをとおして、医療と介護の連携が進んできていると感じている。一人ひとりの患者さん、区民の方をとおして多くの関係者と協力ができており、これらの関係者は自分たちのできる範囲やそれを超えて対応していることが江戸川区の強みだと感じている。

今後、社会福祉協議会で終活と死後事務に取り組むとのことだが、大変期待している。

一方、課題としては一人暮らしや老老介護・認認介護の方々も増えてきており、その支援の必要性が高まっている。家族がいれば介護サービスの必要なく、介護認定の必要もないような方が、一人暮らしだと何らかの支援が必要ということで介護認定を受ける。こうしたことも軽度認定者が増加している一因なのではないか。大病院では「救急を断らない」としてさまざまな背景の方を受けていただいているが、そもそも契約ができない、例えば意識がなかったり認知症の症状が強い方などのケースでは、区の方で音頭を取り、その方の緊急連絡先や万一の事態があった場合の治療の意向などに関する登録制度のようなものを実施していただけると、医療の現場としては大変に助かる。全ての区民をカバーして、いざというときでもなんとか対応できる体制になったらよいと思う。

委員

職種間の連携に関して、地域でも会議をよく行っている。イベントに関していえば、例えばなごみの家や薬局などでの開催予定の会があれば、さまざまな職種の方に周知をして

いただいております、集客に向けて色々手を打っているが、もう一つ参加者は伸びないというのが実情。他の事業所でもイベントを実施されており、互いに周知しながら取り組みを充実させていければよいと考えている。

少子高齢化が進み、医療介護業界をはじめ色々な職種の働き手が少なくなっていく。訪問看護は、利用者が重度になってから入ることが多いが、ずっと元気でピンピンコロリでいけるよう、予防的などころでも私たちが関わればよいと思う。

認知症に関しては内服でコントロールできていけばいいが、上手くコントロールできずに介入が難しいケースが最近目立つように思う。主治医の先生は、その方の自宅の様子を実際に見ていただくと、通院のみの関わりよりもその方の理解が深まり、よりよい対応が可能になっていくと思う。こうした状況は本人も辛く家族も大変な思いを抱えていることも多く、私たちが上手く架け橋となっていきたいと思っている。

委員

特別養護老人ホームも含めて、人材不足は介護業界全体での喫緊の課題となっている。私たちの施設では今年度も退職者の補充ができず、職員が少なくなってきた状況が続いている。そうした中、職員の構成を見ると、ついに外国人労働者が日本人よりも多くなり、全体の6割5分くらいが外国人という状況にある。

とはいえこのまま手を打たないというわけにもいかない訳で、今後の方向としては、外国人や高齢者、それから次の世代の人材という観点で高校生や中学生に介護のやりがいや楽しさ、そして具体的にはどういったものなのかなどを教育していきたいと思っている。

次に、今日の論点とされている地域の強みについてお話したい。私たちの法人では、えどがわ見守り隊という地域ボランティアの活動支援をしている。その発足の際、その方たちとお話したとき、次のような言葉をいただいたことが印象的であった。「今、高齢社会が進展しているというが、何もネガティブではなくポジティブに考えると、ボランティアができる人がどれだけ増えているかっていうことなんですよ。」

現在、その方々が中心となり数年間地域の見守り活動を継続しているが、こうしたことができるのも高齢社会の一つのあり方と思う。江戸川区には総合人生大学もある。そして、見守り隊の方たちの中には要支援や要介護1の認定を受けた方もいる。見守り活動をすることで地域の高齢者は救われるし、ボランティアの方たちも活動によって介護予防にもなるという面がある。こうした取り組みを今後も継続し、地域の強みを深めていきたいと思う。

委員

地域包括ケアシステムの要素におけるこの地域の強みに関して、私は 16 年間ケアマネジャーをしているが、以前と比べて医療と介護の連携は非常に強くなったと感じる。昔は、正直なところ地域で差があったようにも思うが、今は紹介状を流すとすぐに返してくれたり、電話でやりとりしてくれたり報告書をいただいたり、こうした変化を見るにネットワーク化が進んでいるのではないかと実感している。

我々としても、区からの受託事業である多職種連携研修という場面で、ケアマネジャーに限らず、多くの職種の皆様に分かりやすいよう工夫して研修を実施している。

また、区の地域独自の強みという点で、先日主任ケアマネジャー研修を終えたところだが、そうした場面でなごみの家の取り組みを紹介すると、出席者は、他区にはないこの取り組みに注目をしていた。これはまさに地域の強みと言えるもので、こういった取り組みをしっかりと生かしていくことも重要なことだと思っている。

次に、2 点目の論点である 2040 年を見据えるという点に関して、私達の現場感として単身世帯の方、あるいは単身世帯ではなくてもお子様が精神疾患を抱える方など、対応が難しい家庭が非常に多くなっている印象を持っている。

体感的ではあるが、生活保護の方も非常に多くなっているように感じ、またその金銭管理では成年後見人制度や安心生活サポート事業を使う場面も増えてきている。そういう意味では、安心生活センターなどとの連携ができることは素晴らしいことと思う。

これからの地域包括ケアシステムの深化を見据えると、居宅介護支援事業所をはじめ様ざまな事業所、ボランティア団体など多くの関係団体はあるが、その中でとりわけ重要なことは、熟年相談室（地域包括支援センター）の充実と思っている。これは以前から言っていることだが、江戸川区に設置された熟年相談室は、令和 7 年 11 月現在、19 ヶ所と分室 8 ヶ所となっている。

厚労省の示す包括の設置基準を区に当てはめると 24～29 ヶ所という数になると思うので、それを基に、分室も含めて基準に則した包括を設置しているという考えだと思うが、実際に分室が包括の活動の全てを実施できるかという点、なかなか難しい面もあると思う。

さまざまな施策を発信するためにも、高齢者が相談できる場所からしっかり発信することが重要だと思う。正直言って、包括の方もかなり疲弊しているのではないだろうか。私自身も虐待の相談等させていただくこともあり、オールラウンドで動いている熟年相談室（地域包括支援センター）を充実させることは、2040 年に向けた地域包括ケアシステム深化への基礎の部分と感じている。

委員

論点の中で地域の強みに関して、区の調査ではサービス利用者の8割以上がほぼ希望どおりに利用できていると回答している。これを見て、現場のヘルパーや、訪問介護に限らず年配の方から若手まで、すべての職員の尽力の成果なのだろうと感じている。

地域の強みについてもう一点、私達は訪問介護事業所の連絡会だが、ヘルパーが本当に利用者が一番近い立場で関わっていると感じながら毎日仕事をしている。それは利用者のちょっとした変化への気付き、過去の例で言うと、利用者がある日突然お金の計算ができなくなったことに利用料金の集金業者が気付き、認知症の前段階ではないかとのことで医療に繋げたケースもあった。このように、ヘルパーは現場の中で重要な役割を担っている。

また、次期計画策定の課題については、介護事業所の倒産件数が上がってきている点には危機感を持っている。人材不足もあれば売り上げの減少で運営がうまくいかなかった等、理由はさまざまだと思うが、今までなら競合ライバルだった地域の事業所が、この状況の中でどう生き抜くか、お互いを助け合い、その地域の介護力を上げていくことが大切だと思う。

我々の連絡会としても、顔の見える関係性、横の繋がりを大切にして計画立てて、連絡会を運営していこうと考えている。

委員

認知症グループホームや小規模多機能型居宅介護事業所は2か月に1回、町会長や民生委員と運営推進会議という会議を開催しており、デイサービスでは6か月に1回こうした会議を行っている。

そのような会議でよく出てくる地域の困りごととして町会・自治会の人手不足、特にお祭りの場面で人手が足りない、あるいは防災防犯活動で人手が足りないといった話を聞くことがある。それを受け、介護事業所が町会・自治会のお手伝いに入る事例が少しずつ出てきた。地域との連携という点では、これも地域の強みとして、我々事業所が活かせる一つなのではないかと感じている。

今年度は11月に防災・防犯フェスを3ヶ所で開催したが、我々の団体もブースを出して、高齢者の防災防犯の周知活動をお手伝いしたことがあった。このように、介護事業所として地域に何かできないかということで、さまざまな場面に参加している事例も多く見られる。地域力という点で、我々と地域の皆さんとの連携をこれからも強くしていけないといけないと思っている。

一方で、介護事業所は2024年度、全国で179件の倒産件数があり、江戸川区でも倒

産やM&Aで事業を他の会社に引き継がないと運営ができないという現場も増えている。地域包括ケアシステムを深めていくためには、やはり人材という点をしっかりと検討していかないといけないと思っている。

委員

私達熟年相談室（地域包括支援センター）は地域に出て行き、高齢者の方と幅広く関わる機会がある。そこで感じることは、現役で働いている高齢者の方は多いということ。ほかに、町会・自治会、ボランティア、熟年介護サポーターとして地域で活躍している方はかなり多い印象を持っている。このような地域での高齢者の活動が、生きがいや介護予防に密接に繋がっている。活躍する高齢者が多いことがこの地域、そして江戸川区の強みではないかと感じている。

困ったとき、介護が必要になったときに適切な介護、医療、公的サービスに高齢者の方がしっかりと繋がることによって、高齢者は地域で安心・安全に生活が継続できる。そういった医療・介護のサービス基盤が整っていることは江戸川区の強みと感じる。この点はサービス事業者に対して、熟年相談室（地域包括支援センター）から感謝を申し上げる。

一方で、地域では一人暮らしの方、地域との繋がりが少ない方、孤独を抱える方、認知症によりSOSの発信ができない方が一定数いることも事実である。こうした方々に関して、熟年相談室（地域包括支援センター）やなごみの家では今後もアプローチを継続していく。その活動の中で、高齢者の方々に必要な医療・介護サービスや高齢者施策につないでいき、その方が継続して地域で暮らしていくことができるよう尽力していきたい。

このように、熟年相談室（地域包括支援センター）やなごみの家が引き続き地域で活動を継続していくことが、地域包括ケアシステムをさらに深めていくことに繋がっていくのだろう。

委員

私たち民生児童委員は、地域から、町会・自治会から何名といった形で推薦され、仕事をさせていただいている。この活動を区民の方に知っていただくため、民生児童委員とはどういう仕事をしているかということに記載した広報紙の発行を今年度からはじめた。

地域でも、民生児童委員としてお宅に伺うと、大きな声で個人情報に関わるような話をしないと言われることもあり、訪問は簡単なことではないと感じる。しかし、在宅の高齢者や困っている方の声が直接聞ける存在が私たち民生委員だと思う。活動している私達委員同士も研修会等により連携しているが、地域の熟年相談室（地域包括支援センター）やなごみの家、社会福祉協議会に助けをいただきながら活動ができている。

委員

町会・自治会や民生児童委員の皆様とともに地域福祉を推進する社会福祉協議会は、区から受託してなごみの家を運営している。私も各なごみの家を訪問しているが、地域によって課題がさまざまであると感じている。地域によって異なる課題を拾い集めることが、なごみの家に配置しているコミュニティソーシャルワーカーの役割である。

地域福祉の動向としては単身高齢者の増加、頼れる身寄りがない高齢者への対応が課題となっている。これについては医療・介護とチームを組んで対応していく形が社会福祉協議会としては理想的だと考えている。

また、成年後見関連についても、社会福祉協議会だけでは解決できない問題もある。いつもケアマネジャーや医師、医療ソーシャルワーカーの皆様にご助けをいただいている。このようなチームの基盤ができているのも、江戸川区の強みと考えている。これをますます強固なものにしていきたい。

なお、成年後見制度はこれから見直しが見込まれている。その方向性はあらかじめ決まっており、利用促進の観点から活用しやすいよう改正がなされるとされており、今後は補助人の審判を受ける人が増えていくと予測される。改正案では、後見人の支援は限定的になる場面も増えると想定され、そうなる地域での役割が重要になってくると考えている。これからの地域を貸していただきながら、区と連携を取り地域福祉を進めていきたい。

委員

地域包括ケアシステムの拠点としてなごみの家が誕生して10年が経過した。今回の議題にある地域の強みは、地域活動の担い手が多いことだと思っている。

そのうえで、なごみの家が負うミッションとしては、次世代の担い手の確保だと思っている。次世代というと生活をして、仕事や学業もして、その中でさらにプラスアルファを求めることになる。そのプラスアルファの隙間時間をどう捻出するか。後は、どこかに所属するとかではなく、入りやすくかつ辞めやすい、参加への敷居が低くなるよう工夫し、次世代の担い手を確保していきたいと思っている。ただし、この動きに即効性はないとも思っている。

私がなごみの家の現場に居た時、民間企業から、「地域のために何かしたい。でも何をすればよいのかわからない」との相談を受けることもあった。社会貢献という形で民間企業の力を借りながら、福祉以外の分野も地域を結び付けられないかと、社会福祉協議会やなごみの家での取り組みを検討している。

また、単身高齢者の増加と言われているが、そうすると相手方に情報が届かないことも考えられる。そうしたときでも、情報を集約して分かりやすくしたり、専門職同士が連携することは既にできているのかもしれないが、それをいかに相手方へ届けるのかということまでは議論がなかったと思う。そういう点も民間の力を借りてさまざまな形で多角的に発信できたらいい。これが次に取り組むべき課題と思っている。

委員

介護における問題点としては、人材不足や財源など問題点は色々あると思うが、一番力を入れなければならないのは、介護予防の部分と考えている。区の政策を見ると、やはり口腔ケアを初め多様な健診を実施しているところが強みかと思っているので、これら健診を効果的に実施して要介護認定を受ける方の数を減らすということから着手していくのが、もっとも効率的で充実した高齢者施策になるのではないかと思っている。

私事だが、日頃より江戸川区のparasports経験者と一緒にparasportsの指導員の活動をしており、障害のある方々と運動をして汗を流しているが、ボランティア活動に参加するほとんどの方が60代70代で、こうした年齢層の方がparasportsの推進に努めている。外出する、汗を流す、色々考えるということで、この活動も健康寿命延伸の一つになっていると感じている。江戸川区は、特に23区の中でも障害者スポーツに力を入れていると聞いている。こうした活動は人のためになる、さらに自分も健康維持といった観点で自分のためにもなっている。役割の創出という意味では大変よい活動と考えている。

委員

区民の代表として、江戸川総合人生大学やくすのきカルチャー教室に参加したときの感想を述べたい。私は後期高齢者になっているが、私達の世代の参加者はすごく少ないと感じている。

私たちの世代は、激動の昭和の40年代から60年代までを過ごしてきており、知識は豊富にあると思う。そういう人たちが集まれる場所を、今70代80代を迎える人達が集まれる場所を作りたいと考えており、なごみの家や熟年相談室（地域包括支援センター）とお話ができたらと思っている。

くすのきカルチャー教室では女性の参加者が多く、「旦那さんも連れてきなよ。話をしようよ」と奥様に声をかけても、なかなか男性は出てきてくれない。受講した身として、江戸川総合人生大学やくすのきカルチャー教室はいいことをやっていると思うが、例えばカルチャー教室では6割ぐらいの人が2回以上参加している人たちと聞く。そうすると

初めての受講者は 4 割ということ。これが 6 割から 7 割にまで広がれば、とてもよい場所になって、区が推進している地域の輪に繋がっていくのではないかと思う。

また、最近では地震が各地で起きているが、いざというときに繋がる、助け合うというのは、日頃の繋がりがあって初めて「頼むよ」「わかったよ」という話になっていくのではないかなと思う。初対面の人と何ができるかと言ったら、それは難しいと思う。さまざまな機会で会議・打合せを重ねているからこそ何かあったときに繋がれるのだろう。課題を統計的に捉えるのみではなく、区民にとって良かったと思うような企画を推進していただきたいし、そのためにはこのような会議の場での結論とならなかったとしても、この中で育った人たちが繋がっていけばいいと思っている。

委員

私は、若年性認知症家族会の会長をしている。その関係で、特養などのスタッフの方と接することが多い。普段から感じることとして、最近の介護職員は外国人の方が増えてきて、利用者の家族の方からは言葉が通じなかったり、という意見も出てきている。私が見る限り、外国人の介護職員も一生懸命に働いて、非常にいいなと感じている。これからも外国人の介護職員が増えていくのではないかと。先ほどの委員の話では、施設の職員のうち 6 割ぐらいが外国人との話もあった。そういう時代になってきていると思う。だからこそ、我々の方も家族の方も、こうした状況を受け入れざるを得ないと感じている。

もう一点、独居高齢者が増加していることも問題と感じている。先日、私の住んでいるマンションの独居高齢者で、約束していたのにその方が部屋から出てこないという話があった。表から見ると電気はついている。確かに人は居るはずだと、私もその方の部屋に行って何度もインターフォンを鳴らしたものの、結局部屋から出てくることはなかった。

これは一大事だということで、親戚の方に連絡を取って、さらにその方が警察に連絡して、警察が隣の部屋から入ったという事態になった。結局、幸いなことにその方は無事だった。どうも話を聞くと、部屋から出てこなかった方は前の日に転んだりして動けないという状況があって、それで部屋から出てくれなかったようであった。もちろん、携帯電話を何度もかけたが応答はなし。なぜ携帯に出なかったのかを聞くと、「携帯の電源が切れていた」との返答であった。もはやそうになると、周りはどうすることもできない。

現在、月額 2,200 円の負担により、区の進める見守り事業「マモルくん」がある。できればこれを普及していただきたいと思っているが、この 2,200 円というのがなんとも微妙な金額で、本人が納得して契約できる金額なのか非常に微妙な価格帯である。「マモルくん」は業者が鍵も預かってくれるし、トイレを使わないと駆けつけてくれるというよ

い点もある。その辺を PR して、何とかうまく設置を推進していただけると、独居の高齢者にとっても安心の材料となるのではと思っている。

今度、私もマンションでくすのきクラブを作ろうと思っている。独居高齢者をはじめ、高齢者世帯がかなり多くなっているのに、自治会はあるが、月に何回かみんなで顔を合わせるような機会がない。

くすのきクラブをつくれればそういう機会ができると思うが、事務処理などがすこし煩雑と聞いている。その辺も、こうした会の普及と言う面では難点かと思っている。

委員

私は 70 代の一人暮らしである。この 1 年間は週に 3 回、鹿本中の隣の体育館に通っている。それから、オリンピックボランティアを皮切りにスポーツ関係のボランティアをしている。又、長く動物園ボランティアをやっている。そういった活動を社会参加というのであれば、私は地域と交流をしているし、繋がりもあると言えるだろう。

しかしあと 15 年が経つと、私も 89 歳になる。その時の自分がどんな状況なのか、これは正直予測がつかない。くすのきカルチャー教室も行きたいが希望者が多くてなかなか受講できない。自分がこの先どうなっているかをもう少し具体的に描き、安心して暮らしていきたいと思っている。この 1 年のように活躍し、いつまでも継続したいと思っている。

委員

私達ファミリーヘルス推進員は、各町会・自治会から推薦をいただき、8ヶ所の健康サポートセンターから選任され活動をしている。地域の皆さんが、介護保険を使わずに元気に外出できるよう、勉強会やウォーキング、スポーツといった取り組みを、医療関係団体にも協力をいただきながら活動している。

各地区でのこうした活動から、私自身もあまり病院にかからず健康を維持し、この委員会にも参加させてもらっており、他の推進員も皆元気である。

このように元気な方は町会・自治会で活動をし、周りに元気を分けてあげながら、なるべく介護保険の世話にならないようにしていきたいと考えている。

委員

私はくすのきクラブに所属しているが、今回の資料で、地域包括ケアシステムに私たちの活動が組み込まれていることを初めて知り、これまでとは違った考え方で活動をしていかなければならないと改めて感じている。

資料 5-1 にあるとおり、193 クラブ、会員約 1 万 2 千人の規模で活動しており、元気な高齢者が多く所属している。このクラブには 4 つの活動テーマがあり、一つは、「教

養の向上」で、研修会や、講演会、趣味の教室、趣味の会などを毎週実施している。そこで新しい知識やスキルを得て充実感を高め、また、色々な世代の方との交流を深めるきっかけにもなり、地域活動を活性化する一つの方法となっている。

二つ目は「健康」。楽しみながら健康を保つことができるよう、健康に関するセミナーや体操教室、ウォーキングなどを行っている。特に町会・自治会を中心として構成されているリズム運動は週 1 回実施しており、町会・自治会のクラブのうち 9 割が参加する、非常に活発な活動である。これには区の支援もあり、指導員を派遣してもらって、その指導員がリードしながら運営されている。こうしたことで元気な高齢者が育まれ、結果的に、医療等にかかる費用負担が軽くなり、元気な高齢者が増えることで明るい地域になっていくことを目指している。

三つ目は「レクリエーション」。季節ごとに色々なイベントを行っており、例えば敬老の日には区の支援により「長寿の集い」という、みんなで集まるきっかけづくりをしている。その他、旅行や、区の体育館での輪投げ大会やリズム運動などの催しものも行っている。こうした取り組みにより、楽しみながら体を鍛えて、高齢者同士の絆が深まっていけばと思っている。これらの活動が高齢者の孤独感を和らげ、地域イベントに参加することで共同意識を高め、地域の一体感を生み出すことに役立てばと思っている。

四つ目に「ボランティア」。地域活動に参加することで、高齢者自身が「自分はまだまだできる」という充実感を得られるし、他の人を支える立場にも立てるという喜びを感じることもできる。

以上のとおり、くすのきクラブの活動は、高齢者自身の生活の質を向上させるだけでなく、みんなが集まって支え合うことで、明るい地域社会の発展にも寄与できる。それがくすのきクラブの、そして区の強みではないかと考え活動している。

委員

区内には約 280 の町会・自治会、8 つの連合町会があり、それをまとめた連合町会連絡協議会がある。委員に専門職が多いこの委員会でいつもお願いしているが、まずは町会・自治会の会員になっていただきたい。そして、町会・自治会の行事にグループで参加をしていただければ、そこで他の会員や区民の方々から相談事を受けるかもしれない。区の職員はいずれも町会・自治会の会員になっているとは思いますが、まず専門職の方々が、仕事ではなくボランティア活動に参加をしていただいて、コミュニケーションが生まれていくことが一番ではないかと思う。

委員

まず区の強みについて、私達区議会議員も地域の方から「あそこのお宅が心配だ」といったご相談をいただき訪問することがある。訪問し地域の熟年相談室（地域包括支援センター）に連絡すると、すぐに職員の訪問に繋がったという事例があった。こうした連携こそが地域の強みだと感じている。

一方で、連絡が取れなくなるという状況の方も一定数いるのも事実で、一人暮らしの高齢者や、とりわけ認知症の方は大きな課題であると考えている。また、家族がいても日中は高齢者だけになり、心配な状況になっていることに家族はそれに気づいておらず、こうした世帯を近所の方が心配しているという状況もある。

ボランティアをする側が要介護・要支援の方ということもあるとの話もあったが、支援する側・される側と一律に決めるのではなく、色々な状況で助けたり助けられたり、さまざまな方々が活躍できる環境を整えていく。なかなか一步目を踏み出せない方が、外に出て取り組めるような、参加のハードルを低くした仕組みづくりが私達の仕事であると考えている。地域の方々、現場の方々のお話を聞かせていただきながら進めていきたい。

委員

私の専門が社会老年学ということもあり、いくつかの自治体でこのような会議体の委員をさせていただいている。本日も多くの委員もご指摘されていたように、介護人材不足や単身高齢者の増加、あるいは地域包括支援センターの負担の増加。これらは多くの自治体で共通の課題として挙がってきている。それと同時に、自治体によっての違いもやはり存在しており、この江戸川区においては、事業者間の連携や区民の方、特に高齢者の社会参加、あるいは区民同士の繋がりの強さが江戸川区の強みであると同時に特徴でもあったと感じた。

これらを活かしたような形で、地域包括ケアシステムを深めていければよいと思う。

副委員長

今日のお話を聞いて、区の地域力が十分に機能していると非常に心強く感じた。介護保険制度が始まった頃は、いかに地域力を発揮させていくかが課題だったが、20年以上経ち、大いに進化・進歩していると思う。

資料の中では、定期的な見守りの割合が低下しているという点については、同僚や友人が亡くなっていくということも要因の一つと考えられる。社会の関係性が希薄になったということではないが、単身高齢者が増えてきているということを見ると、何らかの関わりを持たせるためにどうしたらいいか。特に医療機関は、医師がいかに福祉に関わってい

くのか介護保険制度初期の課題だった。それが制度開始から 20 年以上経過すると、医師が医療と同じような形で患者さんに関わるようになってきたと感じている。

ところで、今日は皆さんに問いたい。区の介護認定審査の結果をみると、要支援の割合が少し多いのではないか、これが良いことなのか悪いことなのか。私の患者さんでも、息子と母親の 2 人暮らしで、息子が長期出張する際に心配なので介護認定申請をしたいという相談があった。色々とお話を聞いてみると、その申請の主な狙いは、母親に何らかのセーフティネットを持っておきたいということのようであった。申請の結果、要支援 1 になったが、おそらく介護サービスは使っていないと思う。

私は介護認定審査会の委員長を務めているが、不必要な人には認定を出さないというのが基本姿勢。と言っても要支援 1 に関しては、ほとんどサービス使わず、使ったとしてもせいぜい週に 1 回デイサービスを利用する程度で、そこまで費用のかかるものではないので、高齢者のセーフティネットとしてはこれも一つの方法ではないかと思う。

最後に、資料 5-2 にもあるとおり、肺がん、大腸がん、乳がんの検診率が増えてきている。私は医師会で乳がん検診を担当しているが、この結果は、これらのがんが増えているということでもある。おそらく受診者もそれを心配してがん検診を受けるのだろう。

余談になるが、日本人の乳がん検診受診率はおよそ 40%で、OECD の中では、下から 3、4 番目の受診率。先進国では 8~9 割が乳がん検診を受けている中、日本は 4 割しかない。これに対して日本の医療は遅れているのではないか、患者さんの意識が低いのではないかという話もあったが、よく考えてみると、日本の医療機関、皆保険制度が上手く機能しているから、乳房にしこりがあればすぐに病院で検査をしてもらえる。こんな国はどこにもない。素晴らしい医療保険制度は大事にしなくてはならないと思う。

委員長

本来ならばニュースなどでも色々な問題が取り上げられている中、文句や不満を言いたくなるころかと思うが、この会ではそういった批判的な意見は出ることなく、委員の皆さんの見ている目線、見解が高いと感じた。そういった意味で非常に参考になるご意見をいただいたと感じている。

私からは一点、地域の強みにに関して言えば、やはり地域の底上げが重要だと思う。確かに、私達医療や介護など事業者の状況は厳しい中にあるが、少し手助けをする部分、それは人・モノ・金に関わらず、少しずつ地域をサポートしていく流れが必要なのではないか。そういった意味では、やはり多職種連携・情報交換を積み重ね、育てていくことが必要に

なるし、それが事業者の底上げ、そしてインフォーマル面での地域の底上げの手助けになるのであろう。

できないこと、欠点に関して頑張っ、効率の悪い事業を実施しても費用がかさんでいくばかり。それならば良いところを伸ばしてそこにお金をかけて、力を伸ばしていくことで、より良い方向に動いていく。今日の皆さんのお話にも出た好事例や好体験にサポートをしていくような動きが、今後 2040 年までの間に出てくるのかもしれない。そういった情報共有の場を見逃さずに事業に展開していくことが大事なことだと思う。

本日は貴重なご意見をいただき、ご参加の各委員に感謝を申し上げます。

6 その他（事務連絡）

事務局

令和8年度検討委員会は全6回開催予定。

第1回 日時：令和8年6月10日（水）19時から

7 閉会